★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版２－５）

川瀬健一

５）「武蔵国府寺」創建伽藍の復元

では四期にわたった歴史を持つ「武蔵国分寺」のそれぞれの時期の実年代はいつなのかという問題に移る前に、この寺の創建伽藍を復元しておこう。私たちはこの伽藍を「武蔵国府寺」と呼びたい（この理由は後で述べる）

a） 創建伽藍復元の手掛かり

創建伽藍を復元するにはいくつかの手掛かりがある。『新修国分寺の研究』『国分寺創建』所収の武蔵国分寺についての論考や、福田信夫著『鎮護国家の大伽藍　武蔵国分寺』、さらには国分寺市教育委員会発行の『見学ガイド　武蔵国分寺のはなし』などを精査してみると、次のような手掛かりがある。

①塔１とこれを取り巻く伽藍区画溝 FGH とその相互関係。

塔１の心礎から東に 42mの所に伽藍区画溝 FG がある。そしてこの溝は塔１の東南で直角に曲がりその溝 GH と塔１との距離は同じく 42mである。

※ここが復元の最大の根拠である。

②９世紀に塔２が建設された。これが創建伽藍で塔２を建設する予定で会った場所に建てられたと仮定すると、塔１と塔２との心礎間の距離が 54mであるので、創建伽藍の伽藍区画溝の南辺の長さが、42＋54＋42＝138mと仮定できる。

以上は、「新修国分寺の研究」と「国分寺創建」に収められた武蔵国分寺についての研究論文からわかることである。これに加えると、

③福田信夫氏が『鎮護国家の大伽藍　武蔵国分寺』Ｐ59 で指摘した、塔１の南 90mの地点で発見されたこの地で最古の布掘地業遺構である。

要するに溝なのだが、ここからはこの地出土の中で最も古い須恵器が出ているという。この溝は伽藍区画溝 GH にほぼ平行に走り溝からの距離は 48m。同書所収の「武蔵国分寺跡全体図」（訂正２－１冒頭に掲載）ではこの場所に細く線上に走る掘立柱建物が記録されていることから、この溝は創建伽藍の伽藍外郭溝の一部ではないかと思われ、この溝の北側に沿って掘立柱の塀が立っていたものと思われる。そうだとすれば①②に基づいて復元される創建伽藍の伽藍区画溝に、東西と南北にそれぞれ 48m加えた大きな伽藍地が復元できる可能性は大である。

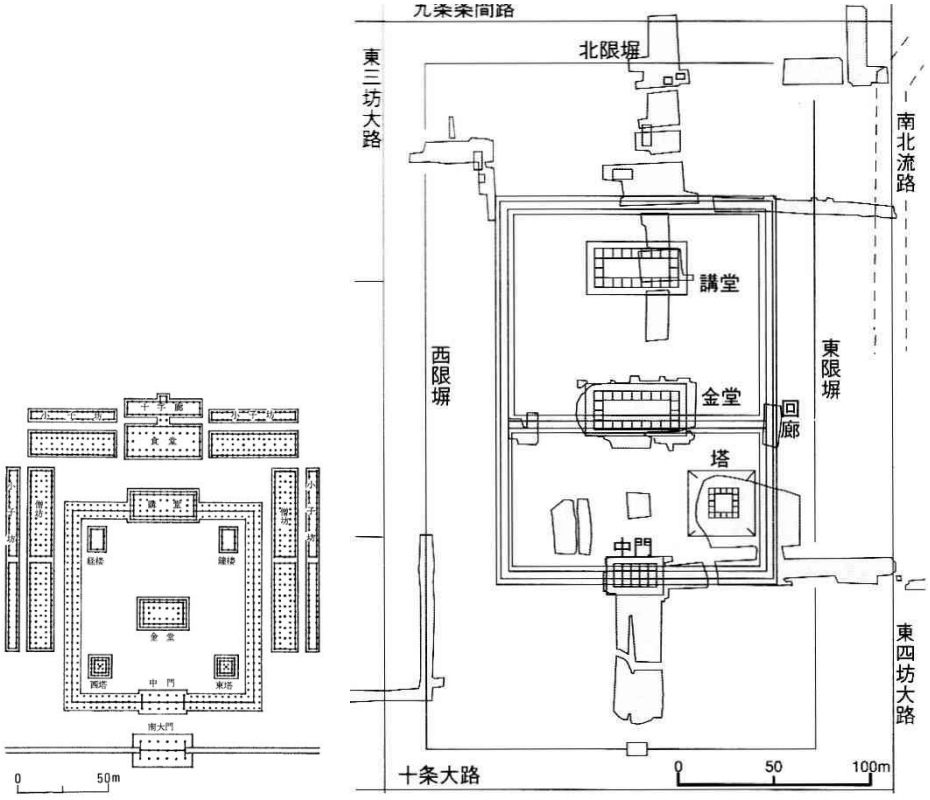
b） 双塔式伽藍の設計思想

双塔式の伽藍は、薬師寺式伽藍と大官大寺式伽藍の二つが存在する。従来単塔式と考えられてきた大官大寺も発掘の結果、双塔式に作る予定であったが東塔だけが建設されたところで造営が中断したことが確認できているからである。

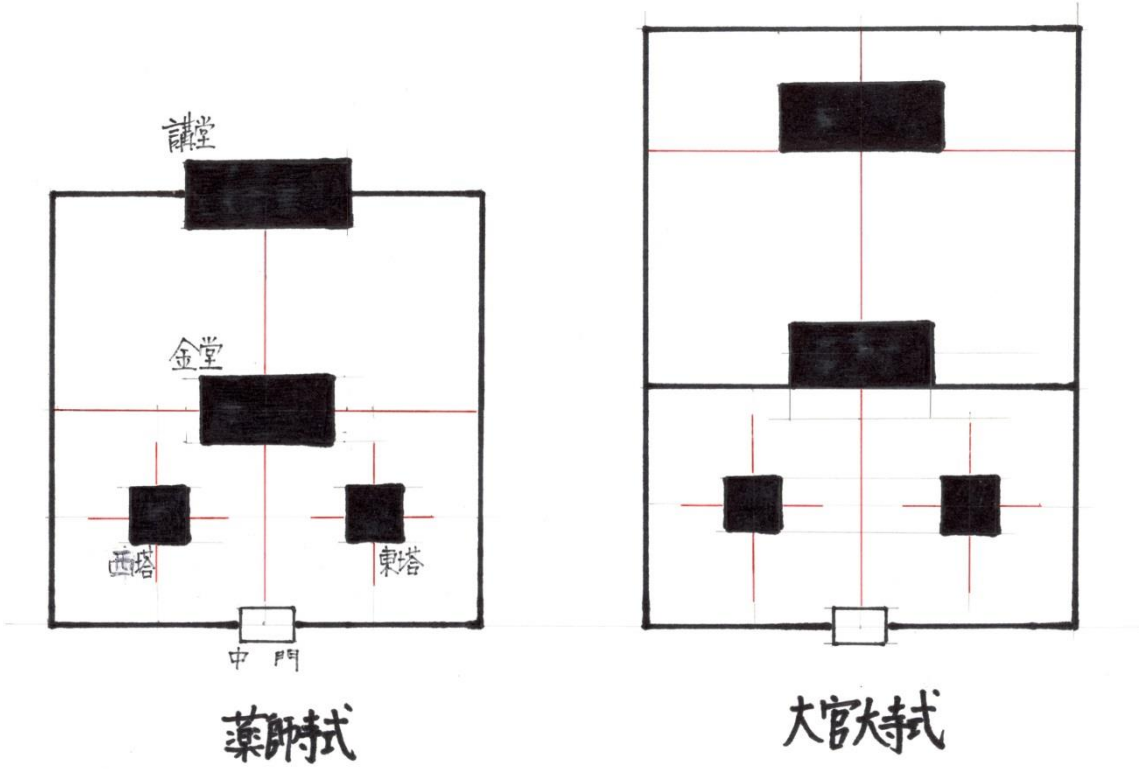
この二つの伽藍形式の設計思想を調べてみよう。

薬師寺式伽藍の設計思想を調べてみると、「①東西両塔の心礎間の距離の二分の一と東西両塔心礎線から金堂の中心までの距離が等しい」ことがわかり、さらに「②伽藍は正方形③正方形伽藍の中心に金堂　正方形伽藍の中心軸と回廊の交点に講堂　④伽藍内郭区画南辺から金堂中心の距離＝区画の一辺の二分の一、金堂中心から講堂中心の距離＝区画の一辺の二分の一」であることがわかる。検討に使用した図面は、小笠原好彦著「本薬師寺の造営と新羅の感恩寺」（日本古代学第 3 号 27-40 頁、2011 年 3 月）所収の「薬師寺伽藍復元図」である。

また大官大寺の設計思想を調べると、およそではあるが、「①中門・金堂・講堂が伽藍中軸線に南北にならぶ　②伽藍区画は南辺の半分を 100 とすると東西辺の金堂までの長さは 111.5 で南北に長い長方形をしている。③中門と金堂の距離と金堂と講堂の距離は等しく、塔は中門と金堂との距離のほぼ中間に配置されている。④講堂から講堂の北側の伽藍北辺までの距離は金堂と講堂の距離の半分である。」とすることができた。検討に使用した図面は、木下正史著『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』（角川選書）掲載の遺跡復元図である。



これを図示すれば次のような模式図になるであろう。



C)創建伽藍の復元①

ではこの模式図によって先の条件の①と②を加えて復元を試みてみる。なおこの際に、金堂や講堂だが、「金堂院」として作られた際の金堂と講堂とは本来創建伽藍に置かれるはずのものを移設したと仮定して創建伽藍を復元してみよう。こう仮定した理由は、金堂と塔１との基壇外装が川原石の乱石積と同じであるので、二つの建物は同じときに一つの計画に基づいて作られたが、金堂は組み立てられないまま放置されたのではないかと考えたからである。そして講堂は基壇の外装はまったく塔１・金堂とは異なり瓦積なのだが、寺院を建設する際に、一つ一つ建物を作っていくのではなく、骨組みなどは一斉に作っていくのではないかと考えたためである。

★　薬師寺式、大官大寺式と仮定して復元した場合

東西の塔と伽藍区画溝との関係は、それぞれ東辺西辺から塔心礎までは 42mであり、南辺からは 42m。塔相互の距離は心礎間が 54m。したがって東西の塔を結んだ線から金堂までの距離は 27m。伽藍区画溝の南辺の長さは＝42＋54＋42 なので 138m。したがって区画溝の東西辺の長さもまた 138m。金堂はこの正方形の区画の中心に位置し、講堂は北辺の真ん中に位置する。

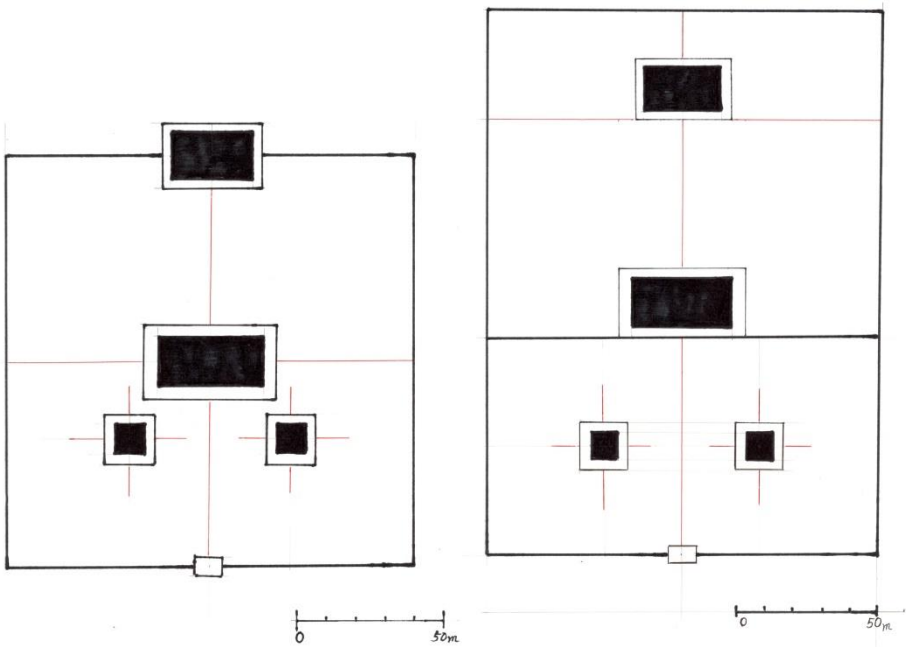
なお通常薬師寺式の場合は、塔は東西の塔を結んだ線の回廊・区画溝から東西長の半分の真ん中に置かれるか、三分の一の位置に置かれるのであるが、「武蔵国分寺」の場合はす

でに塔 1 と塔 2 の場所が特定されているので、これにしたがって復元した。

また大官大寺式と仮定して復元した場合、　東西の塔と伽藍区画溝との関係は、それぞれ東辺西辺から塔心礎までは 42mであり、南辺からは 42m。塔相互の距離は心礎石間が 54m。伽藍区画溝の南辺の長さは＝42＋54＋42 なので 138m。ここまでは薬師寺式と同じである。

この南辺の半分の長さ、すなわち 69mを一単位とすれば。中門から金堂までの伽藍の東辺と西辺の長さはこの 1.115 倍、すなわちおよそ 77mとなり、南辺と東西塔との距離は 42m、塔から金堂までの距離は 35m、そして金堂から講堂までの距離は 77m、さらに講堂から北辺までの距離は 38.5mとなる。

以上の二つの結果を図示すれば以下のようになる。



この伽藍中枢の伽藍区画溝の外側に、先にみた塔から南に 90m離れ、伽藍区画溝からは 48m離れている溝が伽藍外郭溝の一部だと仮定すれば、これらの復元案の伽藍区画溝の外側に、東西と南北にそれぞれ 48m加えた大きな伽藍地が復元できる可能性は大である。

この結果を見ると、薬師寺式の場合は、二つの塔と金堂とが近接しすぎて不自然であるが、大官大寺式だとこの不自然さは解消され、すっきり均整のとれた伽藍形式である。

以上の仮定による復元では、大官大寺式が適当なように思われる。

だが先に見た条件だけではこれが創建伽藍だとは断定できない。

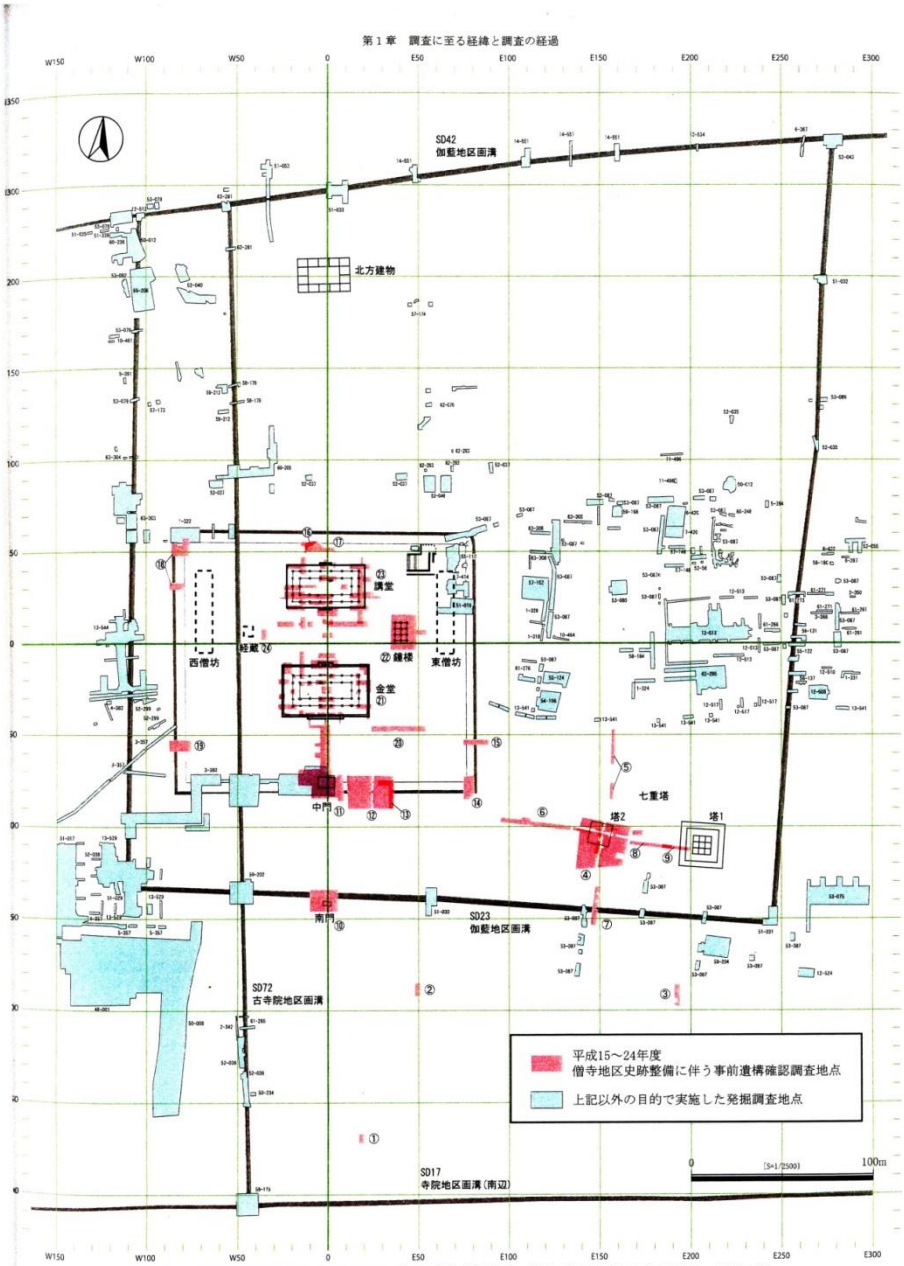
D)最新報告書に見られる創建伽藍の痕跡

ではこれに最新の報告書による知見を加えてみよう。

ほかに創建伽藍を復元するに資する痕跡はないのであろうか。

遺跡の発掘結果を最新の報告書（「武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅰ」平成 28 年 3 月刊）で詳細に眺めてみると、これ以外にも痕跡とみられるものがあることに気が付く。

まず最新の発掘報告書の詳しい全体図を見てみよう。

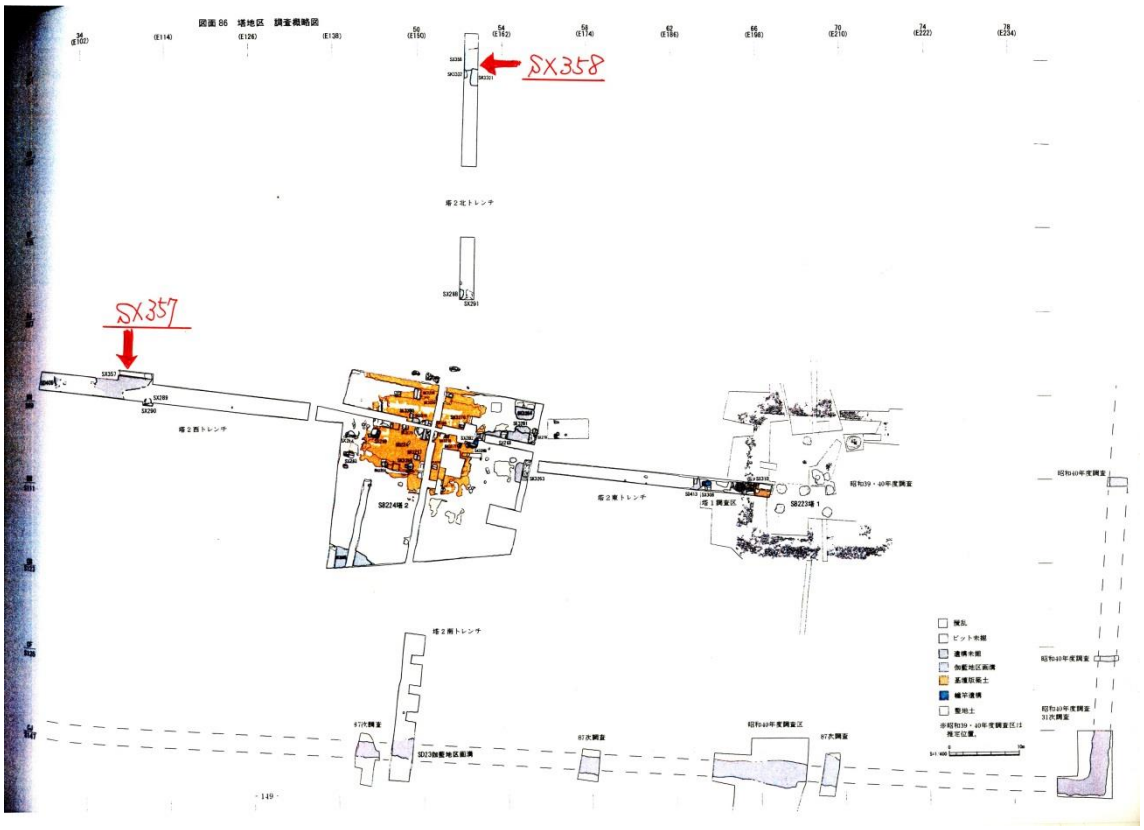


第２図　史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）事前遺構確認調査　調査地点位置図（平成 15 ～ 24 年度）

① 伽藍区画溝の詳しい図面を上の最新の報告書で確認すると、FG 溝は G から北におよそ 150m ほどまではまっすぐ直線的に北に延びているが、ここから何度も角度をわずかに曲げながら北に続いている。また GH 溝もまた、G から西に 200m ほどまではまっすぐ直線的に西に延びているが、そこから少し角度を変えて西に延びている。あるいはこれらの区画溝が途中で角度を変えていることが、創建伽藍の区画溝の痕跡であるかもしれ

ない。薬師寺式と想定した場合には、南辺の長さは 138m で東西辺は 138m、大官大寺式と想定した場合には南辺の長さは 138m、東辺西辺の長さは 192.5m。大官大寺式と想定すると伽藍区画溝 GF の傾きに適合しないように思われる。

もう一つは二つの塔付近のより詳しい報告図である。



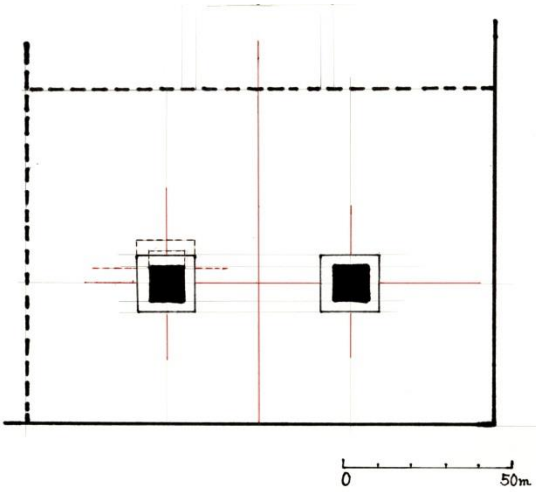
② 一つは塔２の西側、心礎からおよそ 42mのところに発見された不明遺構 SX357（全体図の⑤のところ）である。トレンチに現れた部分では東西に長い穴のようにも見られるが、その東西のおよそ半分ほどの場所でそれぞれ南北に溝が続いているようにも見られる。この遺構は存在を確認しただけで掘り出してはいないので確定的ではないが、もしかしたらこれは塔２が創建伽藍の西塔の場所に作られたと仮定した場合の伽藍区画溝の西辺の一部かもしれないのである。これがそうだとしたら創建伽藍の南辺は 42＋54＋42m＝138mで復元すべきなのかもしれない。

③ さらにもう一つ、塔２の北側、これは心礎から 53mの所に発見された不明遺構 SX358（全体図の⑥のところ）である。これも溝のようであるがほぼ東西に走っており、塔１・２の南側を走る伽藍区画溝 DH と平行に存在しているように見える。この遺構も遺構の存在を確認しただけで掘り出していないので詳細は不明だが、伽藍区画溝 DH と不明遺構 SX358 との距離はおよそ 99mでほぼ東西に並行しているので、これが創建伽藍の主要建物の北側を限る伽藍区画溝の一部である可能性がある。

この②③を先にみた従来の報告書からの析出した①②の条件に加えてみると、創建伽藍

は心礎間の距離が 54mの塔１と塔２を東西でそれぞれ 42m離れた位置、南北では南は 42m、北は 57mで長方形に囲む伽藍区画溝に囲まれた形をしていたように思える。

つまり区画溝南辺から北に 42mのところに伽藍中軸線から 27m左右に離れた塔１と塔２が存在し、さらに二つの塔を結ぶ線から北に 57mのところに東西に区画溝が走り塔１と塔２の二つの伽藍を南北に長い長方形の区画溝が囲っていた。このような形式の伽藍配置が見えてくるのである。これを図示してみると以下のとおりである。



この復元図は先にみた薬師寺式や大官大寺式の模式図と照らし合わせてみるとどうなるであろうか。二つの塔の北側に区画溝があることから、これは薬師寺式ではありえない。では大官大寺式ではどうか。

北側の区画溝の北側に接して金堂があったと考えると、南辺の半分が 69mで中門から金堂南辺までの距離が 99mとなり、100 対 143 となり、あまりに南北に長くなる。このまま大官大寺式として計算すると、南辺が 138mであるのに対して東西辺が 243mと、異様に南北に長い伽藍形式となってしまうので不自然である。

では遺跡から復元した塔周辺図は何を意味しているのだろうか。

詳しく見ると、塔２は双塔式として想定した位置からわずかに北に４mほどずれて存在している。図では実際の塔２の位置を点線で図示しておいた。これでは火災焼失後に創建伽藍の双塔式を復元しようと試みたという仮定そのものが成り立たないように思われる。

ではどう考えたらよいのか。

E)単塔式と考えた場合の創建伽藍復元②

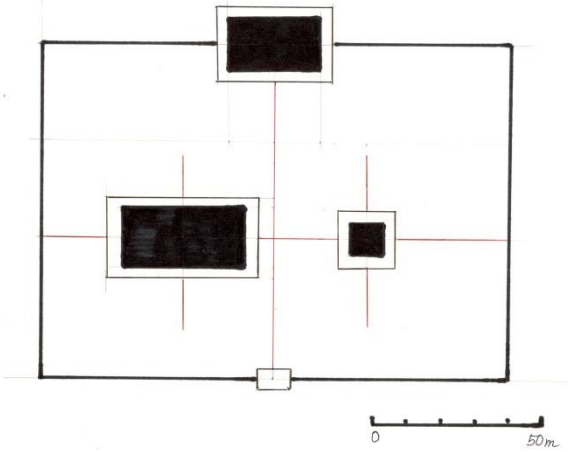
これは創建伽藍は塔１だけの単塔式であり、塔１の西には金堂が、そして伽藍区画溝の北辺の真ん中には講堂があったのではないかと仮定すると、とてもすっきりとした復元案ができあがるのである。そしてこの伽藍の大きさは東西が 138m、南北が 99mとなり、なんと武蔵国分寺遺跡のうちの塔１と塔２を含み「金堂院」の東側の空白域の中の南の部分、

まだ住宅地とはなっていないが、ほとんど発掘されていない地域にすっぽり入る。

こう考えた際には、火災後の再建時に塔２が作られた理由は、創建伽藍の双塔式を復元しようとしたのではなく、創建伽藍の伽藍地と塔１とを利用して、新たに双塔式で再建しようとして、おそらくは費用の面で難点があったために、塔を二つ再建しただけで、西側の「金堂院」は焼けた部分を修復し、さらに講堂を金堂と同じ大きさに拡充し、「金堂院」の塀を、燃えやすい掘立柱板塀から築地塀に変えたと考える必要がある。

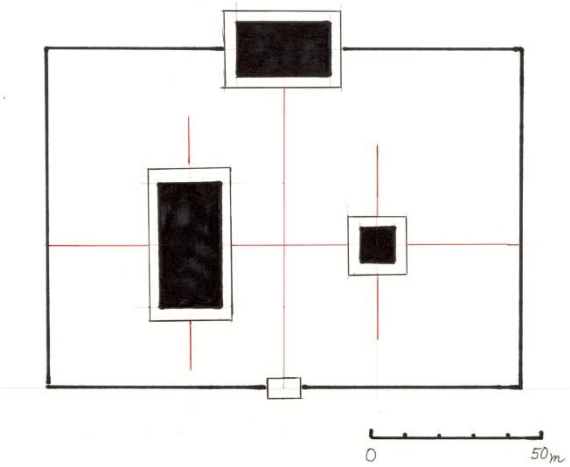
ともかくも、塔と金堂とが東西に並び、それぞれが東辺西辺から 42mのところで、南辺からは 42mの所に位置したと仮定し、講堂は北辺の中点に存在したと仮定する。そして先の復元と同様に、金堂と講堂は「金堂院」のものが創建伽藍のものと仮定して入れてみる。

これを図示すれば以下の通りである。



この伽藍形式は法起寺式と呼ばれるものである。

しかし金堂が東西に異様に長いのでどうも不自然である。試みにこれを南北棟として同じ位置に復元してみると、次のようになる。



これだと金堂が異様に長い矛盾が、本来は塔と向かい合った南北棟の観世音寺式に創建伽藍は作られる予定であったとすると、無理なく解消するのである。

E)復元のまとめ

この検討の結果は、創建伽藍は観世音寺式の可能性があり、この伽藍区画溝の外側に、東西南北それぞれ 48m離れた伽藍外郭区画溝があったと考えられるのである。

しかし「武蔵国分寺」遺跡は全面発掘がなされず、それは遺跡全体のわずかに３％であるという。おそらく現在の国分寺遺跡の中で塔１と塔２の北側の空白域には、創建伽藍の痕跡がまだ多く残されているものと思われる。しかし残念ながら、塔１と塔２の北側および西側は何本がトレンチが入れられただけで、この「金堂院」の東側にある空白域はほとんど調査されていない。そして空白域の北側半分はすでに住宅地となってしまっているので調査は不可能であるが、南側半分は史跡としてそのまま保存されている。この南側を全面発掘してみれば、ここから創建伽藍の少なくとも区画溝と、さらに金堂や講堂の基壇跡ぐらいはでてくるのではないかと思われる。

（２０１６年１０月２０日）